海外研修便り２

皆さんこんにちは。西下病棟看護師の知念です。アメリカ生活も早３ヶ月がたちました。人生初の海外渡航で、来る前はアメリカの治安やコミュニケーション、生活にいたるまでネガティブなイメージを多く持っていました。しかし、実際来てみて思ったことはアメリカ人はとてもフレンドリーで誰にでも気さくに話しかけてくれるということです。道を歩いていると、知らない人からも笑顔で「Good morning!」と声をかけられます。レストランやスーパーに行くとお店の人とお客さんが楽しそうにしゃべっています。また、治安もとてもよく、夜遅くに出歩かなければ安全です。

NY の町並み

さて、現在私は NIH 内のアルコール病棟にて、主にプログラムの見学を行っています。具体的には、日本でもおなじみの認知行動療法や患者の退院後の計画発表やレクリエーションセラピー、牧師によるスピリチュアルセラピーなどです。まだ参加できていませんが、AA ミーティングは週に 5 回あります。

談話室　ミーティングを行ったりします

まず、私がここの病棟に来て驚いたのが、医師や看護師等スタッフが誰も白衣を着ていないということです。このことについてスタッフに聞いてみると、「この方が患者ともっと親密になれるでしょ？」と話していました。実際患者とスタッフの様子を観察してみると、スタッフと患者が友達のように親しげに接しているとこが印象的でした。確かに白衣を着ていることはある意味患者が身構え、緊張してしまう部分もあるのかなと感じました。

ここの病棟のプログラムは基本的に看護師やソーシャルワーカー等の医療スタッフが行い、医師は主にプログラムの評価・修正や患者の治験などを行っています。看護師が行っている認知行動療法を見学してみて感じたことは、看護師と患者がとても活発に意見交換をしているということでした。看護師はただ一方的に講義をするわけでなく、一人ひとりの患者に意見を求めたり、冗談を言ったりして場を和ませています。そして患者もただ聞いているだけでなく、途中で自分の意見や質問をしてきたり、それに対して他の患者が意見したりと、とにかく賑やかです。時には意見が衝突して患者同士で喧嘩に発展しそうな場面も何度かありました。しかし、看護師も慣れているのか動じず、うまく仲裁します。そして看護師も患者もとても楽しそうに講義をしている印象を受けました。講義終了後に看護師に聞いてみると、「このプログラムは私が作ったプログラムなんです。だからどうやったら患者が楽しく聞いてくれるかをいつも考えている」と話していました。ここでは、看護師も主体的にプログラムの作成に関わっているらしく、だからこそ作成者として責任を持ち、いかにして患者に聞いてもらえるかを考えているのだなと感じるとともに看護師のモチベーションの高さを感じました。

来週からは病棟を離れ、外来プログラムの見学や、医師や看護師が行っている研究の見学を行う予定です。残すところ２ヶ月となりました。頑張りたいと思います。

（中央の青カーディガンが筆者です）